

呼称「ごしょういも」の由来異説

日本いも類研究会顧問 浅間 和 夫

I ジャガイモにたくさんの別名

ジャガイモは、他の作物が不作の年でもとれ、生育期間の割にエネルギー固定率が高いため人々が生き延びる手段として広く栽培してきました。最近でも、水稻は農家栽培に委ねていますが、ジャガイモの方は農家だけでなく、高齢者を中心に余暇の楽しみや実益のための家庭菜園栽培など、多くの人々の手で植えられています。このため、ジャガイモにはたくさんの別名が知られています

これらを田口啓作はその共著「馬鈴薯」(1977、グリーンダイセン普及会刊)の中で次のように分類しており、これが広く受け入れられてきました。その要点は、

1. 栽培上の特性をあらわすもの

a) 年間の作付回数

にどいも(2度いも)、さんどいも(3度いも)など

b) 個体あたりの生産量

ごしょういも(5升いも)、はっしょういも(8升いも)など

c) 塊茎の形

なしいも、まんじゅういも、きんかいも(禿頭)など

2. 伝来した地名(国名を含め)に由来するもの

甲州いも、信州いも、じゃがたらいも、オランダいもなど多数

3. 導入した人の名に由来するもの

清太夫いも(せいだ)、善太夫いも、川田男

爵など

4. オランダの呼び名から転化したともられるもの

アップラ、カンプラなど

5. その他

こうぼういも(ありがたい弘法大師)、かびたんいも(オランダの役人)

II かつて北海道では「五升芋」が主流

人の移動が激しく、マスコミの影響が強くなってからは、北海道でもジャガイモやポテトと呼ばれることが多くなりましたが、昭和時代のお上の影響が強い時代は馬鈴薯(ばれいしょ)が主流で、もっとさかのぼれば五升いも(ごしょういも、ごしょいも)と呼ばれていたことが多かったようです。

つまり、探検家最上徳内が天明6年(1786年)に本道に持ち込んだ時は「五升芋」を使っていました。また、箱館奉行村垣淡路守が安政3、4年のころを記録した『村垣公務日記』でも、ペリーの蒸気船の箱館来航に続いたアメリカ商船の求めに応じて、奉行所が「五升芋」250俵を都合したことを記述しています。

また、寛政年間に松前藩主道広の家来が信州より「五升芋」を導入し、虻田で栽培した記録もあります。アイヌ語でも「五升芋」がなまった「コソイミ」や「エモ」が使われていたことから、「五升芋」が古くから使われていたと考えていいでしょう。

安政4年に松浦武四郎が著した『丁巳 東西蝦夷山川地理調査日誌 第23巻 由宇羅布日誌』の八雲における記述に、ダイコン、ヒエ、アワ、キビなどと共に、ここでは「呱巴芋」を栽培していることが載っていました。同じころ、今ロシアが占領しているクナシリ島が間近に見える別海町野付半島の番屋で、番人兼通訳の加賀屋伝蔵という人が「五升芋」または「すないも」と呼んで先住民族に栽培させていたという記録もあります。さらに、松浦武四郎が安政3年（1856年）に記述した『竹四郎廻浦日誌』（巻の壺）の福島村、及び（巻の参）熊石村の項には、始めて「馬鈴薯」の文字が出てきます。

ただし、その福島村の項には、
「人家百五十六軒、一条の町をなし、名物馬鈴薯というものあり」

と書かれています。こちらのほうの「馬鈴薯」とは本物のジャガイモのことで、近ごろ流行の一村一品の紹介文でしょうか？否、正解は遊女のことです。当時遊女をカジカとも書いていました。頭髪を飾りたてたからです。このように、当時遊女は地元でとれるもので呼ばれることが多く、福島村では「馬鈴薯」とも呼ばれていたのです。

この蛇足は別としても、ポテイトウの呼び名には、安政年間からいろいろあったのですが、このことは、アワ、ヒエなどより身近で重要な食糧であったことを示しているのです。

III 「五升芋」の由来は

ところで、「ごしょういも」の由来としては、田口のいうように、1株で5升（約10kg）とたくさん収穫があることによるとする説が多

いのですが、この外、昔5升分を皇室に奉納したからとか「ご薯芋」からきたなどのこじつけと思われる説もあります。

私も、これまで1株で5升ほどもとれるから「五升芋」だとの説をそのまま受け入れてきました。ところが、2003年札幌市に住む北野隆志さんから1株ではなく1坪から5升とれると考えるのが正しいのではないか、との指摘がありました。その根拠として、東京大学資料編纂所編『幕末外国関係文書』（1986年版、北大図書館所蔵）巻29の安政6年11月の項に、五升芋の栽培法の記述があり、『一坪【六尺四方】に大略十二粒程の種をおろし..一坪より四升程を得る事安かるべし..』などと載っていることを挙げています。

当時からしばらく経過した明治19年の初統計で、北海道の平均反収（300坪当り収量）は276貫つまり1,035kg/10a（1株当たり約200g）と非常に低く、また当時の広さの単位としては坪が一般的であったことから、同氏の考えのほうが的を射ていると考えられます。

蛇足になりますが、この文書の外『函館市史』などによりますと、開港後捕鯨や通商のため来日した外国船が牛や五升芋を所望したので、安政4年4月に、今後年々五升芋買い上げるから、なるべく多く耕作するよう通達を出していました。この影響で価格が高騰し、生産も伸びたことから、生食に使う外、箱館奉行所が切り干しの製造所を木古内、茂辺地、七重ほかに設置したり、亀田村（現函館市）の栄治という人が奉行所から金を借りて水車場を設けて澱粉を製造したり、文久元年（1861）農民兵吉が焼酎の製造に挑戦したりしました。〈ホームページ【ジャガイモ博物館】運営〉。